

# 真狩村指定文化財

資料名

真狩祝い太鼓  
(まっかりいわいだいこ)

区分

指定無形民俗文化財

写真・スケッチ



説明 (商品名, 製造所, 使用方法, 歴史, 時代背景 など)

「真狩祝い太鼓」は、昭和50年(1975年)の真狩村開基八十周年を記念して誕生しました。真狩村の四季のイメージを勇壮な和太鼓で表現しています。作曲を担当した八洲秀章さんは、昭和初期から戦後にかけて活躍した真狩村出身の作曲家です。本名を鈴木義光といい、大正四年(1915年)に村の農家に生まれました。二十二歳で上京して山田耕筰に師事し、その四年後に伊藤久男が歌う「高原の旅愁」で作曲家としてのデビューを果たしました。「あざみの歌」「さくら貝の歌」「山のけむり」といった抒情歌謡や童謡のヒット曲を生み出し、日本レコード大賞童謡賞や勲四等瑞宝章叙勲を授与されるなど活躍を重ね、昭和60年(1985年)に神奈川県鎌倉市で、その生涯を閉じられました。

「真狩祝い太鼓」は、一般的な和太鼓演奏とは異なり、主に女性が担当するシンバル、トライアングル、カスタネット、拍子木、鉦(しょう)のパーカッションが加わります。和太鼓の力強いリズムに、パーカッションの多彩な音色が絡むような連弾は、従来の和太鼓演奏曲にはない華やかな印象です。日本歌謡の最前線で活躍し続けた八洲先生ならではのアレンジといえましょう。

「真狩祝い太鼓」が生まれるきっかけとなったのは、その二年前、八洲先生が作曲した富良野彌榮太鼓でした。八洲先生が和太鼓の演奏曲も手掛けることが知られ、真狩村の開基記念式典に、ぜひ郷土出身の作曲家による和太鼓演奏曲を、との要望が真狩村議会を中心に起こり、依頼を快諾した八洲先生は、演奏曲が完成した昭和50年(1975年)4月、村に一週間滞在し、事前に選抜された8名の若い奏者を厳しく指導されました。その後も奏者たちは自主練習を重ね、八月の式典当日には、見事な演奏を披露したといいます。初演奏と同時に発足した保存会から次代に伝えた奏法は受け継がれ、「真狩まっかりいわい祭り」や村のイベントなどで勇壮な太鼓の音色を響かせています。

(平成18年5月30日、真狩村指定文化財 無形民俗文化財に「真狩祝い太鼓」が指定。 継承団体／真狩祝い太鼓保存会)